

令和4年度 第1回浜田市総合教育会議議事録

日時 : 令和4年6月29日(水) 10:00~11:57

場所 : 庁議室

構成員 : 久保田市長 砂川副市長

岡田教育長 宇津委員 花田委員 杉野本委員 岡山委員

事務局 森脇教育部長 邊教育部社会教育担当部長 草刈教育総務課長

山口学校教育課長 永田学校教育課社会教育担当課長

鳥居学力向上推進室長

議事

- 1 市長あいさつ
- 2 協議事項
- 3 その他

1 市長あいさつ

森脇部長

定刻になりましたので、令和4年度第1回総合教育会議を始めさせていただきます。

開会にあたり、久保田市長より挨拶をさせていただきます。

久保田市長

今年度最初の総合教育会議である。

今日はすでにご案内しているかと思うが、大きく二つの点について皆さんのご意見を承れればと思う。一つはICTの活用である。

国も、子どもに一人一台パソコンを配備するというので、我々もこういったICT教育というのは力を入れていきたいと思っているが、まだまだいろいろな課題もある。これについてのご意見も承りたいと思っている。

もう1点は協働のまちづくりについて。今浜田市では、昨年の4月から従来の自治区制度に代わって、協働のまちづくりという取り組みをしているが、これは比較的、大人の方々が中心の活動ではあるが、とはいえ、学校や家庭、あるいは子どもたちも含めて、皆さんに参画していただける可能性についてどうなのかということも含めて、協働のまちづくりのテーマでの意見交換をさせていただきます。

今日は大きくこの二つの点について皆さんに意見を承りたいと思っているので、どうかよろしくお願ひしたい。

森脇部長

本日の傍聴者は、0であることを報告する。

この会は、市長が招集して進行することとなっているので、協議事項の進行については、市長にお願いしたい。

2 協議事項

久保田市長

それではまず先にレジュメに沿って、ICT等を活用した学力育成の取り組みをテーマに意見交換、協議を行いたいと思う。

先にICTを活用した学力育成について主に議論させていただき、その後ICT活用以外にも学力を育成するために、こういった取組があるのか。こういったことを意見交換ができればと思う。

事務局からまず最初に資料で説明させていただく。

事務局よろしく願います。

鳥居室長

学力向上推進室の鳥居である。よろしく願います。

ICTを活用した学力育成ということで、資料を用意している。まず資料1-1をご覧ください。

令和3年度に作成した浜田市ICT活用教育ハンドブックの中から、今回必要となる箇所を抜粋し、資料としたものである。

このハンドブックの中身だが、GIGAスクール構想で目指す浜田市としての考え方、それから令和5年度までの大まかな計画、それから授業で活用できる活動紹介、大まかだがこのようなことについて掲載されている。

ICT機器は授業の質の向上を図るためであること、あるいは特別支援教育の充実を図るための道具として活用するという点について明確にし、学校職員がいつでも見られるように準備しているものである。

続いて資料1-2である。

昨年度作成した、浜田市で行われたICT機器を活用した授業実践例の一部である。

例として小学校低学年、高学年、そして中学校の授業例。また、オンライン授業例として臨時休業中と不登校生徒への対応、これらの実践について掲載させていただいている。

資料1-3は令和3年度末に実施した教職員への教育用端末活用アンケートについてである。教職員に一人一台ずつタブレットを渡しているが、その活用についてのアンケート結果の概要である。

紙面の一番下のところを見てお分かりだと思うが、授業場面での活用については週3回以上が2割程度にとどまっているという

ことで、まだまだ活用はこれからだなというところがデータからも見えてくる。

久保田市長

以上、大変簡単であるが、ICT活用教育に関する説明である。この後意見交換ということだが、この点はどうなっているのかといった質問でも結構である。あるいはご意見でも結構である。皆さんからいろいろなお話を伺えればと思う。

最初に皆さんから一つずつお話をいただきたいので、宇津委員からお願いします。

宇津委員

子ども一人一台のタブレット端末が入るまで、全国的なうねりの中で配布が可能になった。それが入ったときに私はかなり驚きをもってそれを見ていた。果たしてこれをどうやって使うのだろうか、どんな風に使えるのだろうか、子どもたちはどのように取組をするのだろうかという驚きを持って見ていた。

幸いなことに学力向上推進室長が非常に ICT に関しては優れた才能をお持ちであると同時に校長会の中にも非常に長けた、県下有数の力を持った校長先生がいらっしゃる。それとタッグを組んで、この推進にあたってこられた。

みるみるうちに子どもたちは、私が心配するまでもなく、遊び感覚で飛びついている。その上に教育長からのメッセージを添えて手渡された。これも非常にインパクトがあったのではないかという気がする。

君たちの応援をしているよということ、教育長自らが発せられ、これも非常に大きな効果を生んだのではないかという気がする。

こと幸いに進められてきたが、最終的には日常的にそれが使えるように、普段使いという言葉が途中で出てくるが、普段使いができるようにといったところに目標を設定されている。まだまだそこまではいっていないのかなという気がする。

同時に、子どもたちはそういう取組をしているが、教員の側からすると逆に十分使いこなせていない先生方もいらっしゃる。これはやむを得ないことだと思うが、しかし研修を重ねることによって、これはなんとかクリアしていかないと、ここ数年の問題ではなく長い将来にわたっての課題であるので、研修が大事であると思う。

素晴らしい取り組みをなさっているというありがたい気持ちも表しながらお話をさせていただいた。以上である。

久保田市長

一つ一つ事務局からという時間がかかるので、一通り言ってもらった後、事務局からコメントなり頂戴するという進め方でよろしいか。

事務局

はい。

久保田市長

それでは続けて花田委員お願いします。

花田委員

私が一番興味深い、可能性があるのではないかと考えていることが、長期欠席者のためのオンライン授業というところで、私はどうしても特別支援に日常的に関わっているが、特別支援の診断も進んで、いろいろなタイプの子が、本当に多様性というか、様々に増えているというところと、その特質がゆえに集団の中で学習することが困難な子どもたちが増えている中で、この長期欠席者のオンライン授業というところの可能性はすごくあるのではないかとこのところはとても期待している。

具体的にどの程度、どの子がどのくらいカバーできているのかというところと、また各家庭とオンラインで繋ぐというところもちろんあると思うが、私どものような事業所とか、不登校の子どもを預かっているような場所が学校ともつとがつつり、今日はこの授業をどのように進めるというような話までしながら一緒に学校の一部のように協力できていったら彼らの学習保障が本当に可能であるなというところは、とても期待を持っているところである。以上である。

久保田市長

続けて杉野本委員お願いします。

杉野本委員

まずはICTを効果的に活用するということで、授業力向上を目指す、特別支援教育の充実を図るというふうに、ICTの役割という部分をしっかり明確にされているところが大事ななと思った。

得てして新しいものが出ると、どうしてもその使い方に慣れること、使い方の方に夢中になってしまいがちだが、そこを割いた上で授業をしていくということは本当に子どもたちに力を付けるための道具だというふうに捉えているところが、現場の先生方もきちっと理解されていることが大事なことだと思った。

目指すところが、児童生徒自身がいつ使おうかなとか、あるいは授業の中で使う子がいたり、紙媒体のものを使う子がいたり、というところまで、期待したいということが書いてあるが、そういうすごく、子どもたちが追求したい気持ちを、大事にするような授業構成となると、ある部分指導者側も、そういった授業構成みたいなものを受け入れていくというか、構成の仕方あたりも、

柔軟に対応できる教員の資質の方も必要になってくるのではないかなと思うと同時に、子どもたち自身がしっかりと、何のために使うか、学習の目当て、この辺りしっかりと持っていていただくことも大事だろうと思う。

今回コロナ関係で臨時休業中に、持ち帰りということが、県内でも浜田市は本当に早く対応ができたということは、この体制を整える上で素晴らしいことだなというふうに昨年度見させていただいた。

遅くまでの準備で大変だったと思うが、それによって、オンライン授業なり、いろいろな部分で子どもたちと家にも、学校が繋がれる部分は、もう一つの ICT の活用の仕方にも広がっていいかなと思った。

一つ先ほど、花田委員もおっしゃられたが、長期欠席者の学習効果というところまで広がっていくということは、授業だけでなく、いろいろな意味で広がりを感じることができることだなというふうに感じている。

資料 1-3 にあるように、実際に授業で活用している教員が、若干若い人が使いやすいかなというのがあるが、とりあえずは先生方も 5 割は使っている。ただ子どもたちは、まだ 2 割程度だということところが、ステップ 1、ステップ 2、ステップ 3 のステップ 2 に今入っている段階の中で、いろいろこれから、研修されたり自信を持たれながら、子どもたちの活用に広がっていくのかなというふうに期待している。以上である。

続いて岡山委員お願いしたい。

私は現在中学校に我が子がいるので、そのあたりのところで実際使っている現場の感想も交えて、お話をさせていただこうと思うが、先ほど杉野本委員が言われたように、コロナで休校中に、朝礼をタブレットを通じてやるということで、タブレットが配られる前の休校は、生活リズムが崩れてしまい、ただ家にいるだけというかたちになっていたのが、朝礼をしてくださることにより、生活リズムも整い、宿題がどこまでできているかといった確認も入りつつ、学校には行けないが、ちゃんと先生や学校と繋がっているというふうなかたちで活用ができているということを目の当たりにできたことはすごくよかったなと思っている。

それから、今まではパソコン室でないと調べ物ができずに、学校から帰ってしまったら学習の続きができないということがあ

久保田市長
岡山委員

ったが、タブレットを持ち帰ることによって、その続きが家庭でできるということは非常に学習の幅が広がったということはあるかなと思っている。

地元の小学校で聞いた話では、コロナの影響でPTA総会が開けなかったところを、Teamsを使ってオンライン配信でPTA総会をやったということもあったので、だんだんそういうことも全部含めて、このICTの活用ということが学校現場を少しずつ変えていくと関わり方も変わるし、本当に対応ができるんだろうなというふうに思っているので、使い方はこれから、今から本当に模索されているところではあると思うが、学校間の場合、情報交換であるとか、それこそ教育委員会側の提案であるとかそういうことによって、もっともっとこんな活用の仕方があるっていうことを広く、いろいろな方々に知ってもらい、今度はこのような使い方ができるのではないかと、どんどん活発な意見が出てくるようになればいいなというふうに思っている。以上である。

久保田市長

ありがとうございます。

一通り各委員の皆様からご意見を頂戴した。

先ほどの意見に対して、解説とか教育委員会側の説明があれば願います。

鳥居室長

花田委員から長期欠席者等々の実態はどうかといった問い合わせがあった。正直なところ、一旦すべては把握していないので申し上げることはできないが、各学校では子ども、あるいは保護者へ、タブレットを活用して参加しないかという声かけはしている。

保護者にも子どもにも了解がいただけたところについては、オンラインで流して、ということで、強制はしていない。

子どもが参加したい時に参加してくるということは、ほぼずっと、いろいろな授業をずっと流し続けている。その中で、子どもが参加してくる。

オンラインでやると自分の顔が映ったりもするが、それをしない操作もあるので、その辺りの選択も子どもの実態に応じてできるように、各学校取り組んでいる。

通信環境がない、あるいは弱い家庭というのも、実際に不登校等々の家庭にもある。その辺りの対応についても今後も検討して取り組んでいく計画をしている段階である。

大変ありがたいお言葉いただき、山びこ学級に来ている子ども

私たちはいろいろ対応できるが、各事業所等々とも連携してというありがたいお言葉もいただいている。そこまで進んでいけるようになるのととてもいいなと思う。

持ち帰りは可にしているので、各事業所等々でも活用しながらという可能性は十分広がると思う。

研修という話がいくつか出てきた。先ほどの実態のところ見ていただくと、案外若い先生方が授業で活用するのではないかというようなことを期待していたが、蓋を開けてみるとそうでもない。そういったところが、ICTを活用した授業の難しさだろうと思う。

皆様からご意見をいただいたが、ICTを活用することで授業の質が高まらなくてはいけない。何のために使ったのかということもある。

そこで若い先生方は割と授業を構想するのが、なかなかというところがあるので、まずはICT以外のところで授業をすることが今のところ精一杯というようなところもあるのかなということが、ちょっと分析として考えているところである。

今年の夏休みに研修を考えているが、午前中はすべての学校から1名参加して、いろいろな機能についての概要を説明する。

午後は4つのブースを設けて、今のワンノートやチームスであるとかいろいろな機能がある。

それについて、希望者が接続をしてオンラインで各学校から参加する。先生方のニーズに応じる、個々のニーズに応じる研修を、今考えているところである。

そういったかたちでどんどん活用してもらえるようにしていきたいと思っているところである。

岡田教育長

今、特に小学校でいうと、教員になった時には考えてもいなかった小学校英語をやることになったり、それからICT機器を活用することになったり、入ってから大きな教育の改革があったんじゃないかと思っている。先生方に大きな戸惑いがあると思う。

ただ、このICTの役割というのは、子どもたちにとっては学ぶための道具だが、先生方は、その授業で分かりやすく教えるための、授業力をアップするための道具として使っていかなければいけないというところで、そこに大きなハードルがあるのだらうと思っている。

今教育委員会としては、まずは使っていただくということから

始めてくださいと言っている。失敗もするかもしれないが、そこで気付きがあり、だんだんステップアップする。そういうタイミングだろうと思っているが、学校任せにするのではなく、ICTのサポートスタッフを配置したり、それから授業での活用例などをハンドブックにまとめたりして、学校の教員の支援も努めており、基本的に学校の現場からは、そうした教育委員会の支援については、非常に好意的に受けとめられていると思っている。

改めて学校の声も聞く中で、どういう関わりをしていくかということ、これから教育委員会としてもしっかり考えていきたいと思う。

ただ、このICTは何でも使えるかという、使える授業、使わないほうが良い授業、いろいろあるので、その辺の線引きがこれから課題になってくるだろうと思っている。いずれにしても学力、生きる力を育てていく上でこのICTをどううまく活用していくかというようなことは、これからの大きな課題だと思っている。

久保田市長

全国市長会でも、コロナが始まった2年ぐらい前には、タブレットを生徒一人一人に配置するべきだと言っていた。どちらかというとその議論から入って、国の予算つけて、タブレット一人一台の配置はできた。

ただ、今日皆さんからいろいろご指摘があるように、果たして使いこなせているのか、あるいはまた先生方もそれを、うまく教育に活用できているのかというその辺りのソフト面とでも言うか、おそらく大きな課題だろうと思う。

このことについてはぜひ教育委員会の方でも、課題をもう1回整理をして、その課題を解決するためにどうすればいいのか考えてもらいたい。

今聞きながら思ったが、先生方もタブレットを使って上手にやっていたらしゃる先生もおられれば、そうでない先生もいるのだろうと想像する。うまく使っている先生の模範授業を見てもらうとか、研修がなかなか難しければ、ビデオに撮って、それを見てもらうとか。

おそらく全国では皆同じようなことやっているの、上手に使っておられる事例は、文科省などでそういったものを流したりしていないのか。

鳥居室長

文科省のホームページにスタディーエックススタイル

(StuDXStyle) というようなところがあったりする。そこに実践事例は出ている。

浜田市としてもこれはいいなと思う、そういったホームページの紹介は各学校へそこを見られるように、ネットワーク内で、そういうことはさせていただいている。

録画についても、結構録画したものを YouTube に上げて、先生たちだけしか見られないが、QR コードをつけて、いつでも見られるようなというように、実践事例を紹介したり、昨年度の指定校の報告会、座談会方式でやったが、そういうものを見られるような取組はさせていただいている。

久保田市長 自宅に持ち帰ったときに、環境がなくて繋がらないといったご家庭は、浜田市はどうなっているのか。

山口課長 実際調査したが、約 2 割の家庭が十分でない環境にある。

先ほど長期欠席の子どもや臨時休校等の対応のときに、そういった子どもをどうするかということが、実際課題として出てきた部分である。

久保田市長 環境が整っていないところに対しては、市としてはどうしようとしているのか。

宇津委員 これは新聞に載っていた記事なので、どうかなとも思うが、鳥取県の江府町の例が一つ出ていた。8 月からになるのか、インターネット接続の部分で、子どもがいる家庭に補助をするというような記事が出ていた。見ると、年間で 6 万円ばかりの軽減になるという、太い金額だなという気がした。江府町なので、浜田市と比べると全然その規模が違うので、なかなか右左というわけにはいかないだろうが、そういう自治体も出てきている。

久保田市長 市長会でも、いろいろな活用についての国からの財政支援を求めたりという活動はしている。

実際にタブレットを持ち帰って、自宅でできる家庭もできない家庭もある。その辺の対応をどうするかということは、国の予算が付く付かないの前に、市としてどうするのかということは、その辺は対応を考えておいてほしい。

岡田教育長 段階的に進めていく必要もあると思っている。

先ほど 2 割程度がなかなか十分に使える環境にないということだが、インターネットは各家庭でも 95% 程度はされているが、それが携帯電話だけで繋がっていたりするので、タブレットを持ち帰って使えるかという難しい面があるわけである。

ただ、すべての家庭に持ち帰ってできる通信環境を整備しようと思うと、繋がるためのWi-Fiという機器を買うのは最初に一括でできるが、通信料がずっとかかっていくということなので、それを行政が浜田の規模の子どもたちすべてにやるということは、なかなか厳しいことがあると思う。

そうすると、例えば家庭でできない場合は近くの公共施設に幾らか休み中であれば集まったり、すべての子どもたちというわけではないが、そのようなところも考えながら段階的にやっていき、使いこなせそうだとするときに、次のステップでどう考えるかということをする必要があるかなと思っている。

ただ、学校でそういうことをいう時に、言葉、届け方を気を付けないといけないのは、家庭で通信環境がないというのが分かってしまうことに対しても、差別感というか、その様なものもあるので、少しやりにくいところもあるが、少しずつそういうことをやっていく必要があるとは思っている。

今教育委員会としてはすべての子どもたちの家庭での通信環境の前に、まずは学校に来にくくなっている子どもたちの対応が、取り組みやすいのではないかと、好意的に受けとめてもらっている事例もあるので、この辺りが、まずはどうなのかということをしつかり、教育委員会の中でも議論していきたいと思っている。

久保田市長

当初自治体の中には、持ち帰ると先ほどの通信環境が整っているところとそうでないところの差があるので、持ち帰りをあまりさせないで学校だけで使うというやり方もあった。

ただ、コロナがどんどん広がる中では、逆に、岡山委員からもあったが、自宅のできるから、効果があるということだが、今の教育委員会の考え方とすれば、やはり自宅でもやりましょう、学校だけではないという、そういうスタンスか。

岡田教育長

そうである。家庭とも繋げていけるように将来的にそういうことを見通して、ちょっとステップを踏んで、いろいろな課題を整理していこうと思っている。

例えば持ち帰っても、子どもたちが授業とか自分の調べ学習だけで使うかということ、今それでなくてもメディア接触の時間を短くしようということで、ゲームだったりとか、インターネットの使用だけみたいな環境になってしまうと、果たしてそれがいいことかどうかということもあるので、その辺をどう整理していくか

久保田市長

ということも課題だと思う。

この後の学力の話にも少し繋がるが、私も素朴に疑問、心配がある。

タブレットが面白いから、どんどん子ども達は使うだろうが、一方で、浜田市の子どもたちはメディアの接触時間が長過ぎるという、そういうデータもある。そうすると、逆にそれを加速させるのではないかという心配もあるが、その辺は、委員方、岡山委員はどうだったか。

岡山委員

持ち帰るタブレットの接続は 21 時になったら切れるので、うちの場合は、勉強に使うタブレットもとにかく 21 時までを使い、調べることは調べてしまうという、そういう割り切り方も子どもたちはしている。

それと同時にやはり、子どもたちにとっては新しく面白いものであることは間違いないが、PTA の講演会で本当にメディア接触の話親子で聞いて、家で子どもたちだけがどんどん使うのではなく、やはり親側も、保護者側も見つめる目を育てていかないといけないということが多分、この ICT の活用に絶対必要になってくる。

子どもたちだけにタブレットを与えて活用すればいいというものではなく、やはり大人側も、そのメディア接触について自分たちも考えないといけないと思うので、それを、多分今後の話にもあるが、地域として、家庭としてどうやって捉えて、子どもたちと一緒に、こういう ICT とどうやってつき合っていくかということは、同時にやっていかないといけないことだと思う。

例えば同じように、研修の機会であるとか、講座を聞く機会であるとかいうことを親子で聞く、地域と子どもたちで聞く。いろいろなかたちでやっていくと、見つめる目も変わってくるのかなと思う。それも同時にやっていただきたいというのが、感想である。

久保田市長

今、大変良い指摘を頂戴したように思う。

もちろん学校の先生方にも、ICT をちゃんと活用できるようになってほしいが、各ご家庭も、保護者も ICT を活用する教育について、やはり理解をしてもらい、これは使っているが、使う時間をこうするとか、保護者向けの資料のようなものも必要な気がする。

教育委員会はその辺はどのように考えているか。PTA の会合な

鳥居室長

どで必ずこのテーマを話しているとか。

各学校の ICT、情報モラル、そういったことについての PTA の研修、あるいは子どもへの研修というのは、講師を呼んだり、著名な講師の方や、企業が無料でそういったことをやっていただけるといようなこともある。

各学校、ほぼ1年に1回程度はそういったところをやっている。それがすべての保護者対象なのかということになると、そうではない部分もある。

先ほどからおっしゃっているとおり、保護者へのアプローチが上手にいかないと、学習で使うのではなく、この前ニュースで出ていたが、全国的にスマホ等々の活用が3時間超えたというようなデータもニュースで出ていた。

その中で、保護者はルールを決めていないとか、いや私は決めていくとかいうインタビューがあったが、その辺のところをしっかりと見ていかないと、学校だけではもうお手上げだろうなというところがあるので、地域、保護者と連携をしながら、地道に研修をやっていくことが必要であろうというふうに思っている。

久保田市長

ぜひ講師を呼んで講演してもらおうということもあるかもしれないが、各家庭で子どもたちや PTA の皆様方に、スマホも含めた ICT 機器との付き合い方について理解をしてもらおうような、そういった場づくりも必要なのだろうか。

今の部分、委員方はいかがか。

岡山委員

たまたま地元の学校で、PTA の健康保健委員会というのがあり、いつもそういうメディア系のことを教えてくださる医師の方をお招きしてお話を聞く機会があった。そこには保護者も生徒も地域の方も招いたというかたちで、今回講演をしていただいたが、やはり親が子どもにメディアとの付き合い方はこうしよう、時間を決めようと言っても、何かしらの根拠を持っていないとやはり子どもたちも受けとめづらいとか、長く使うのはよくないから2時間までと言われたところで、こういう悪いことがあるからやめたほうがいいよということ、ちゃんとお互いが分かった上ではずっと入ってくるということがあったので、その場にいた保護者の方に話を聞いても、やはり親子で聞いて、お医者さんが言うんだから、確かに良くないようだということをお互い理解した上だと、ルールが作りやすいというふうに感想が上がっていたので、そういう機会を増やしていかなければと思った。

それと、やはり PTA の講演会だと全員参加ではないというところがすごく難しいところではあるので、その辺りをどうしていくかということが課題には上がっていた。

いろいろな講師の方がおられると思うが、子どもたちがちゃんと受けとめやすい、科学的根拠を持って話をしてくださるような講師の方を選ぶということが、今回のパターンのときはよかったなというふうに思った。

久保田市長

今のご紹介も含めて、教育委員会でもメディアとの接触の仕方とか、それを子どもたちあるいは各ご家庭でどうしたらいいのかということを考えてほしい。大変重要なご指摘だと思う。

時間の関係もあるので、関連するが学力の育成について移りたいと思う。その中で先ほどの ICT の話も出てくると思うが、説明はあるか。

鳥居室長

資料の説明をさせていただく。資料 2 としてイメージ図を作っている。これは学力育成総合対策事業を一覧にまとめたものである。1 枚めくっていただいたところで文字がたくさん並んでいるが、一つ一つの取組について言葉で説明しているものである。

太字になっている部分があるが、これが昨年度より変更したところ、新たに取組んでいくところということで黒字の太字にしてある。

本日の資料にはないが、学力の向上については教員の授業力向上が絶対欠かせないものである。

イメージ図の一番下に示しているが、ここに示しているような学校訪問を実施している。

教科等の訪問指導については各学校年間 2 回以上ということで、授業の訪問指導をやっている。

授業改善の訪問指導をしているが、その大元になっていることが授業改善プランとして我々が各学校に示している、「子どもの声で作る授業」ということを基にしている。

この構想を基にして、授業構想の段階から授業者と関わって、当日の訪問指導、それから、授業を我々の指導助言というようなかたちで取組んでいくこと、その辺にも力を入れているところである。

簡単だが、今年度学力育成についての大きな方向について説明をさせていただいた。以上である。

久保田市長

今学力育成対策についての話があった。

宇津委員

これも短時間の説明だったので、十分ではないかもしれないが、これにつきましては先ほどの ICT も含めてでも結構だが、皆様方からご質問ご意見があるか。

私は最も大事なものは、学習集団づくりだろうと思う。

学級という単位の中で、その集団がより積極的に物事を考えて進めていこうよという集団であるかどうか。ここにかかってくるだろうと思う。

いろいろなことがあるにしても、その集団をきちっと作れる、やはりそういう力があるのではないか。

テストの点がよければ云々ではなく、みんなで一緒になって取り組んでいこうよという、そういう集団ができるかどうか。そこがもっとベースにならないといけないのではないか。

要するに学級を経営する能力という、そういう力。授業改善はもちろんだが、本業とするところである。その前に集団作りということをもっと大事にして欲しい。

久保田市長

それは実際には、学校の先生が集団作りに取り組むというイメージか。

宇津委員

担任の先生だと思う。

私はそう思う。担任ありきだと思う。

久保田市長

後程また、教育委員会から考え方をおっしゃっていただけたらと思う。

花田委員

子どもの声で作る授業ということ、私たちがこういった会議で理屈を学んで、実際現場も見たりするが、たまたま私自身が子どもに授業をするという場面を今年度持っているので、実際本当にやってみようと思い、国語と算数でやってみた。

どのように子どもが変化するのかということ、ちょっと体感したが、本当に本当に面白かった。

先生主導で教える教授型ではなく、これをみんながどう考えるかということ、みんなの声からというところを進めたら、本当にみるみる子どもたちの目が生き生きとして、黒板が見えなくても気にしていなかった子どもが急に引き出しから眼鏡を取り出して、本気になってくるというか、本当に急に目がきらきらしてきた。

それは、やはりあなたたちが決めていいんだよという、この権利の譲渡というか、先生がいつも主導で、学校内すべてのことを、授業だけではなく学校のことを子どもたちも一員として考えて

久保田市長
杉野本委員

いくというところを、その権利をあげるというか、ちょっと言い方が難しいが、本当にそのある瞬間あなたたちも主体であるということを感じれば、子どもたちはすごく動き始める。

それを実際いろいろな場面で思うが、それをやるのはやはり集団。今学級で言えば担任と言われたが、やはり私は学校長が各教員の主体的な、各教員の声で作る学校ということを実践できているかどうかにかかっていると思っている。

やはりそれで自分たちが考えて決めていくことの、それには必ず責任がついてくるので、本当にその場合は責任もちゃんと取っていく。子どももそうである。

その当たり前が学校内にあるかどうかというところで、担任だけが学級を作るというよりも、担任自身がその実践を受けている状態がとてもいいのではないかと思う。やはり校長先生の力もすごく意識の改革も必要だと思っている。

杉野本委員はいかがか。

やはり指導力向上、授業力向上のために大きく影響するのは、上手な人の授業を見るということが大きいと思う。

まずは真似てみたい、目指してみたいというところが、参考になるという意味で、アドバイザーの先生がおられて、場面場面で授業のイメージを示されたりされる部分があるのではないかと思う。

あるいはいろいろな学校に授業を見に行きやすいような環境、指定校になっているところもあると思うので、市内の先生の中で、この先生の授業は自分も憧れるなということが出てくるような環境ができてくるといいなというふうに思っている。

家庭学習で学習プリント配信システム中のタブレットを使ったドリルだが、これがいわゆるノートにドリルの計算を書いてやるという今までの方法から、ちょっとやれば丸付けして答えが出てくるという辺りで、子どもにとっては取っ付きやすいのではないかなと思っているが、その辺りは今どのような状況なのか、もし分かれば教えてもらいたいと思う。

場合によっては、それが学校生活の中での時間なのか、放課後児童クラブなどで勉強の時間を少し取るのか。あるいは、昼休み、掃除後に10分ずつ学校で取るとか。そういう時間を取るのは窮屈で難しいかもしれないが、その辺の使い方みたいなものがあるのか。

それから、英語検定料無料化事業について、年度ごとに三級合格者の割合がどんどん増えていることは素晴らしい実績だと思う。

大人の応援に対して子どもたちが答えてくれているのだろうなど、非常に嬉しく思う。こういった部分、それが学習意欲に繋がるということであれば、読書ノートについても、無料で配布しているが、この辺りは何かそういった実績がもしあるなら、成果がどのくらい出ているかなど、その辺りがもし分かれば聞かせていただきたい。

私が現場にいたころは、やはり小学校の担任の先生は忙しく、本当にトイレに行く暇もないくらい、子どもの世話をしたり、関わったり、丸付けをしたり、日記の返事を書いたり、連絡帳の返事を書いたりということで、かなり今は支援員の方を入れていただいている。私は給食ボランティアを地域の人や保護者に頼めないかなとも思ったりしていたが、なかなか実現までいかなかったが、地域の人が学校を応援してもらえるということはすごく助かる。今はコロナのこともあり難しいが、何かそういった人的支援を、できるだけお金がかからなくてできるようなものができるものならできないかなと、自分も今考えているところである。以上である。

久保田市長

いくつか質問があったので、後で教育委員会から願います。岡山委員はいかがか。

岡山委員

今浜田市は協調学習による授業改善ということを一生懸命されていると思うが、先ほど宇津委員が言われたように、学級づくりが大切であるというふうに言われたが、この協調学習とは、グループ分けして、グループ分けした子どもたちがバラバラに専門的なことをそれぞれやって、また違うグループに戻って一つのこと、課題を解決するようなことをやるというふうなかたちをとっている。

この手法を取ると、自分が一生懸命でないと集団に迷惑をかけてしまうかたちの学習方法なので、頑張らなきゃ、自分がやらないとみんなに迷惑がかかってしまうというところでエンジンがかかり、一生懸命やろうというスイッチが入るところがある。そのため、この協調学習の授業改善の部分もあるかもしれないが、集団づくりというところもすごく有効な手法だと思うので、これをどんどん活用していくと学級の雰囲気も変わっていくのでは

ないかなというふうに思っている。

あと 10 番の読書ノート of 配布だが、読書ノートをずっと中学校まで配られ続けるが、配られた最初 of のときに何となく子どもたちのところに、なぜ書かなければいけないのかということが入らないままずっと読書ノートに取り組んでいるところがあるのではないかなということも感じている。

もうとにかく書けと言われるから書いているけど、これは何の意味があるのだろうみたいなところで、もうあまりやる気もないまま進んでしまっているところがあるのかなというふうに思う。

読書ノートを渡されたときに、こういう意味があるから取り組んで欲しいということを先生方からちゃんと説明を受けた上で、スタートさせて欲しいということがある。

あと 11 番だが、中学校 of の英語検定の無料化、我が家も活用させていただいた。これがあるから、先生方も今であれば無料で受けられるからどうかと強く勧めることができると思う。家庭にとっても負担が減るとということもあるし、先生方からも勧めやすいという効果はあると思うので、これによって結構やってみようという層が広がっているかなというふうに思うので、非常にありがたいなというふうに思っている。

あとこの中にある 2 番と 4 番と 7 番と 9 番について。

協調学習や図書館活用、調べる学習は全部情報リテラシーのところと繋がっていると思うので、うまくそれらを連携させていくと、全部 of のレベルアップに繋がるのではないかなというふうに思っているので、それぞれのところで基礎である情報リテラシーのところをやると、どの授業も、もうそこは説明しなくてもどんどんできるようになったりするのではないかなというふうに思う。

それぞれがバラバラに立っているのではなく、その部分をちゃんとつなげた上で進めていただけると、子どもたちのためになるのではないかなと思う。生きる力に絶対これから繋がっていくことだと思うので、その辺りのところを意識されながら、それぞれの先生が意識をされながらやっていくと、今はただ図書館活用 of のことをやっているからとか、ICT の活用だけをやっているからということにはならないのではないかなというふうに思う。その辺りのところをお願いしたいと思う。以上である。

ご質問やいろいろなご意見があつたが、教育委員会からお願いする。

久保田市長

まず質問があったことから答えさせていただきたい。

タブレットドリルの効果がどうなのかということ、今の状況等について質問があった。

長所短所があり、タブレットドリルはあくまでもドリルである。思考力を有したりするような、全国学力調査であるとか、思考力が試されるような問題が出てくるが、それに対応するような設計はなされていない。これは記述式で書いてという採点ができない。あくまでもドリルというかたちになっている。

どちらを選ぶのかということがあったが、我々としてはタブレットドリルの方を選んだということである。

昨年度の12月のところで、通信環境が安定するような環境が整ったということで、使用はずっと増えた。小中学生1人当たりは年間で55.6回ということである。この数が多いのか少ないかと言えば多分少ないだろうというふうに思う。ただ、ネットが使えるような環境が整ってからは、確実に回数が増えていくということがある。

今年度どれくらいアクセスしているのかということも調べてみたが、学校によってまちまちである。さっき言われた隙間の時間に活用させるとか、杉野本委員がおっしゃられたが、朝必ずタブレットを使った学習をするとか、そういうような時間を持っている学校については回数が多い。

4月、5月の平均が9回ぐらいということで、あまり多くはない。ただ、これは全校の中でも9.何回ということなので、使っていない、例えば一年生がいればぐっと回数が減るので、そういう状況である。

今後の課題として、本当に今導入している業者のタブレットドリルが子どもたちのためにとっていいのかということについては、今年1年しっかり検討していきたいというふうに思っている。決してどんどん活用しているような状況ではないというところで、検討していきたいと思う。

それから読書ノートについてだが、以前はすべての児童生徒に配布していたが、今は小学校1、2年生のみ配布させていただいている。

入門期のところで、しっかり読書の習慣をつけてもらいたいという願いを込めて読書ノートを配っている。足跡として残っていくので、そのところも含めて入門期の1、2年生へ配布させて

いただいている。

以前は読書ノート審査会といったコンクールみたいなものがあったが、全県的にだんだん参加がなくなっている。

浜田市も、市としては教育研究会がやってはおられるが、やはりコンクールへの参加ということもだんだん少なくなっている。

一つの理由は、先生たちのやるが多過ぎる。読書ノートまで手が回らない。

だからそこを大切に、子どもづくりをしていきたい先生は一生懸命取り組むが、そうではないところでは先生は少し敬遠をするというような状況が起こっている。

あれもこれも、いろいろなところがいろいろなことをやっていて、そこで対応しきれない先生たちがいる。対応できない先生がいるという現状があることはご理解いただければと思う。

学習集団づくりのお話があった。

学級がいわゆる荒れた状況になった場合、子どもたちの学力が回復してくるのに相当時間がかかる。

例えば、2年生のときに、ちょっと荒れた状況になった。この子どもたちの学力が戻っていくのには、3年生になったから、すべてすぐ回復するというものではない。大体見ていくと、そういう学級が学力調査も低いということが見えている。

やはり学級づくりというところが一番大切になっている。校長会等々、それから、我々子どもの声で作る授業について学校へ説明に行ったりするが、そのときには、土台は学級づくりであるといった話はさせていただいている。

校長会等との研修資料でも、学級作りのことについて出して、校長先生方に学校に帰って研修で使ってください、ということをしていただいている。

岡山委員の言われた協調学習について、これで学級作りができるのではないかという話だが、以前荒れていた学級、学年が協調学習を取り組んだことによって劇的に変わったということ、私は3年間目撃した。この子どもたちがここまで変わった。その子ども達は協調学習が楽しいと言っていた。

理由は自分の意見を大切にみんな聞いてくれる。分からないことは相手が教えてくれるというところがとても嬉しいということも言っていた。

学習したことが記憶に残るというのは、知識のことも、子ども

たちはインタビューのときに言っていた。

今年は協調学習の指定校を1校増やしている。今まで中学校のみであったが、小学校まで広げて3校にした。協調学習をしっかりと取り組んでいきたいと思う。

花田委員がおっしゃったことは、耳が痛いなと思った。

先生たちが自分たちで作るということを、おろそかにするような文化があれば、子どもたちには波及しないということ。それをマネジメントする校長先生の力量も大切だと思う。

今後そういった資料も、校長会等々でも提示していきたいと思っているところである。

英検については、大変ありがたく思っている。順調に伸びている。これがこのまま伸びていけばいいなと思っている。

一番嬉しいのは、英検に向かって子どもたちが自分で勉強する。そのところが嬉しいなと思っているが、残念なことに、英語の学力調査にはなかなか反映していない現状が、ちょっと頭が痛いところである。これはやはり先生たちの授業改善が進んでいないところもあるのだろうと思う。以上である。

今の学習指導要領での一番のキーワードは、子どもたちが主体的で、対話的で深い学び、ここにつなげていこうと、ここが一番である。

すべての教科の土台で、子どもたちの声で作るということを教育委員会も大切にしてきた。

先ほどから協調学習のことについて、委員方からもいろいろ意見が出ているが、私はこれはとても大事なことだと信じて、それを広めていくということに今全力で取り組みたいと思っており、校種も増やしている。校長会でもそのような話をずっとしてきている。

ただ、残念ながら時間かかる。1度になかなか広がっていかないというジレンマがあり、そこで1回取り組まれた先生がこれはいいと思えば、転校されて異動があってもそこでまたやろうと思っただけだが、そこに少し時間がかかる。

何でそこに時間がかかるかというと、やはり先生方が忙しくて、新しいものへのチャレンジをするというようなところに少し敬遠されている向きもあるんだと思っている。

教育委員会ができるとすれば、教職員の先生方が授業改善に向き合うための、時間を生み出すための働き方改革、これに精一杯

取り組んでいくということもある意味必要だと思っているので、その授業改善に向けて、こういう方向がいいよということももちろんだが、それを両方やはり進めていかなければいけないというふうに思っている。

久保田市長

先ほどの鳥居室長の話でちょっと気になったのが、読書ノートで1、2年生だけしかやっていないということ。予算の理由でやらないということは、やはり、あまりよくないだろうと思うので、必要だったらやったらいいと思う。

副市長はいかがか。

砂川副市長

お金のことはいくらでもということにはならないかもしれない。また、必要なものにはしっかり付けていきたい。

先ほどあった英検の検定料の話も、最初は合格した人だけに支給するというやり方をしていた。

ただこれでは、なかなか進まないということで今、受験生全員という、これもだいたい財政と教育委員会の中でやりとりをした。

ただ効果があったということであれば、やはりお金をつけてよかったということなので、先ほどの読書ノートも、効果があるということであれば、1、2年生だけでなく、必要な学年にもやっていく。違うことにお金を使うよりも効果があることに使うということが一番だと思うので、その辺はまた予算要求していただければと思う。

現場の先生のご苦勞、なかなか現場のことは分からないが、大変だろうと思う。先ほど荒れた学級等を立て直すための努力とか、それをまたスタートラインにつくというところ。

それから、進むところには先ほどあったいろいろな上手な授業の仕方を勉強してもらおうとか、生徒のやる気を起こすための協同学習、集団学習、それぞれの先生がどのレベルでどういう手法をとられるかというのは大変だと思う。

これは校長先生なり、教育委員会がやはり現場の状況を見て、こういうやり方がいいというアドバイスをされるのがいいのではないかと感じた。

久保田市長

本当に将来の子どもたちの教育は、将来の地域をどう支えてくれる子どもたちをどう育てるかということはとても重要だと思っている。

私も市長になって9年経った。いろいろなことをやっているが、まだまだちょっと、できていないなと思っている分野の一つ

が教育についてである。

教育委員会が中心にいろいろなことをやってくれているが、もっとこうすればいいとか、子どもたちの教育の問題もあれば、先生方の働き方改革ところもある。

お金が必要であれば、もっともっと市長に直訴してもらっていると思っている。去年の予算がこうだからこれぐらいの、ということではなく、思い切ってやるとか。

あまり私も何でもできますとは言えないが、やはり教育で子どもたちの問題あるいは先生の働き方改革、それが解決できるのであれば、やはり必要なお金を使うべきだと思っている。その辺は、約束はできないが、とはいえしっかりしないといけない。

だけど教育委員会の方からもっと本当に、これは必要だからやりましょう、あるいはさせてほしい、予算をつけてくれということで動いてくれた方がいいと思う。

岡田教育長 いろいろ要望を用意しているので、またご相談させていただきたいと思う。

久保田市長 予算を付ける以上は、効果がどうかということで当然検証は出てくると思う。まずは副市長辺りに相談していただいて。

砂川副市長 ちょっと今年は査定方法を財政課に変えてもらっている。

市長と相談をして、財政で全部落とすのではなく、やはり新規とかは市長ヒアリングに持って行く前に、項目くらいは全部教えてもらい、まずそれをどうするかという議論をしてからやろうと思う。少し変わる。直接言っていただいても大丈夫である。

久保田市長 もう一つの大きなテーマである協働のまちづくりについての話に移りたいと思う。

子どもたちが協働のまちづくりへの参画を見据えた活動ということで、今日は地域政策部も来ているので、この辺についてまず資料の説明をお願いします。

永田担当課長 まちづくりセンターを拠点とした協働事業と社会教育等の手法を活かした人材育成の2つについて説明させていただく。

まずまちづくりセンターを拠点とした協働事業については、現在各センターにおいて、お配りしている資料3-1はまだっ子共育推進事業を行っているところである。

この事業については三本柱で構成しており、地域学校協働活動、それから地域子ども活動、家庭教育支援活動の3つの柱により、学校家庭地域が連携協働して、地域ぐるみで子どもを育むと

ともに、大人もともに高まり合う地域づくりを目指して現在取り組んでいるところである。

ただこの事業に取り組むに当たり、事業によってふるさと教育の視点を持った事業構築を各センター、それぞれ独自性を持って取り組んでおり、実施をしているところである。

この 3-1 の資料に添付している中に、各中学校区ごとでそれぞれ特色のある地域学校協働活動、地域子ども活動、家庭教育支援活動を行っているので、ご覧いただければと思う。

合わせて、資料 3-2 について。こちらについては各センターが子どもだけではなく大人も含めた活動、特にセンターごと特色のある事業を載せているので、ご覧いただければと思う。

また最近の実施状況であるが、先週のところでは杵束まちづくりセンターにおいて、通学合宿というところで、2泊3日で事業を実施している。こちらについては新聞報道もされているが、なかなか市内の方では高齢化であったり、協力できる方がいないということで、以前は結構やっていたところではあるが、今年度についてはこの杵束地区のみということになっている。

また次の、2番目の社会教育等の手法を活かした人材育成ということであるが、こちらについては、これまで公民館において地域の課題、人数を解決するために、地域住民を巻き込んで様々な事業を実施してきている。

地域の課題、地域リーダーとかセンター主事が事業を提案して、その事業の実施に向けて、多くの住民の方を巻き込みながら進めてきている。

実施後には、さらに良い事業になるように検証、振り返りをして、実施をしてきているところである。

令和3年度からはまちづくりセンターに変わっても、引き続き、これまで公民館でやっていた取組を進めるとともに、最近では子どもたちが事業構築のところ、事業参加だけではなく、事業の企画立案段階から参加して、集って学んで繋がる、社会教育の手法による人材育成を各センターによって、少しずつではあるが進めているというような状況である。

①、②の説明については以上である。

続いて学校教育課から、学校におけるふるさと教育についてご説明する。

資料 3-3 が小学校で行っている海洋教育・自然体験推進事業に

山口課長

ついでの実践事例集である。資料 3-4 が県の事業を活用して、小中学校で行っているふるさと教育の活動内容である。

それぞれ発達段階を踏まえたふるさと教育を学校で行っている。

まず小学校の段階では、地域について、地域を知るということを、まず学びの一つとして、この中で、地域にある人や物、それぞれの地域について知ること、調べることを通じて、地域への誇りや愛着を育む。

中学校においては、今度は地域のために何かをやろうという視点で活動をしている。

実際の地域行事への参加で地域の課題を発見して、その課題解決のために提案や解決方法を考えるということで、今後地域を作っていく一員として、自覚や当事者意識を醸成する活動を学校の方では行っている。以上である。

久保田市長

今説明があったが、これも大変分厚い資料を配っているので、十分にはこの時間では説明できないが、宇津委員から、協働のまちづくりという中で、今どちらかという子どもたちのふるさと教育、そういう視点での説明が多かったと思うが、これについて願う。

宇津委員

地域の活動に子どもたちの声が届けられるということは、とても大事なことだろうと思う。

子どもたちというのは、大人が考える以上に非常に柔軟で物の発想が豊かである。突拍子もないことも言うが、しかし、何かヒントがあるような気がする。そういう子どもたちの、物の発想を取り入れていくという大人の姿勢が問われているのではないかなという気がする。

そこで、子どもたちがその地域の課題に対して、五感を通して、行使できるような、ボランティアで活動できるような、そんな仕掛けをする必要があるのではないかなと思う。頭でっかちに理解するというのではなく、自分の五感を通したボランティアの活動ができる仕掛けをしていく必要があるような気がしている。

そのことが伝統的に受け継がれていくと、やはり大人になったときにその思いが、ふつふつと蘇ってくるのではないかなと思う。そういう将来の希望が持てるような地域であって欲しいと思う。

久保田市長

続けて花田委員願う。

花田委員

先ほど、まちづくりセンターなどで活動していただいている中に、子どもが企画から関わっているということを聞かせていただいたが、ポイントは結局そこだと私は思っている。

子どもの活動をしているかのように見えても、すべて大人がお膳立てしてお客さんのように扱って、子どもさんにどうぞというようなのは、全く子ども企画ではなく、子どもたちがまちを作っていく一員であるというところで、それこそ本当に、大人が困っている、これを子どもたちにどうにかしていただきたいというぐらいのイメージで。

彼らはすぐ大人になるので、もう、すぐ市民として働き始める、動き始めるという意識を子どもの時から持ってもらうためにも、そこを預けてしまうというか、何かそれが企画から運営も一緒にある責任を取っていくという活動がすごく重要だと思う。

まちづくりセンターでこういうことしましたと書いてある中も、はまだっ子共育推進事業の写真があって、子ども企画の事業とか、通学合宿とか書いてあるが、要はこの中身が問題だと思っている。それこそ通学合宿も大人が準備して、すべてやってあげたのか、子どもたちがルールを自分たちで決めていったのか、そのやり方をどのようにしたかがすごく重要だと思っている。

そういう視点で評価もしていくべきではないかと、すごく感じているところである。以上である。

久保田市長

今のご指摘については後程、また回答させていただく。

続けて杉野本委員願います。

杉野本委員

まちづくりセンターの理念だったと思うが、その辺を読んだときにこういう大人になっていこうということだと思うが、これは子どもたちにも全員身につけさせたい力だなということ、確かあったと思う。

そういう大人になっていけるように学校や地域等、家庭でいろいろな関わりをしていくといいのだろうなと思いながら、具体的にということで。共育推進事業の資料3-1の2ページ目の子どもたちに身に付けさせたい力というところが、本当にみんなで共有できる、学校もそうだし、地域の人もやりたいなとか、家庭でも自分のことばかりではなく周りの人のことも考えるようになるというと思う。

本当に共有できるように、もっともっとこんな、何度でも皆さんに、親でも地域の人でも見えるような、もっと表に出されて、

浜田の皆で育てたい子どもの姿ですよ、というような、もっとアピールしていただきたいと思う。

原井小学校が取り組んでいるような実績例があるが、小さい頃から地域の人と関わり、楽しい思いをしたり、それから6年生くらいになると、本当に地域についての課題を自分が小学生なりに捉えて、考えていく。

二中が行っている、まちづくりの魅力みたいなことへ、まちづくりへの意識に繋がっていくような、連動していくとすてきな取組になっていくだろうなという気がした。

子どもたちも、大人がもっと関わっているということを、今福まちづくりセンターの取組があったが、いろいろなグループが関わって、町を盛り上げていこうとしている姿が、いろいろな世代の方を入れようとしている、取組をされている。

その辺りの姿を見せていく中で、子どもたちが地域の愛着を持ち、花田委員も言われたが、自分たちが少しでもまちづくり、地域づくりに参加しているというところが見えてくるといいかなと思う。

中学生だったら、あと5年もすれば本当に地域を作る仲間になっていくし、小学生だとたった10年で本当に地域づくりの仲間になっていく。本当にもう、すぐそばで、自分たちの浜田の中でも、例えば今市や三隅、岡見、地元で育てて作っていく仲間になっていくとするなら、地元にある課題をしっかりと捉えて、一緒に、大人は大人でこう考えているが、子どもは子どもなりに、こういう方法もあるのではないかと、10年後20年後を見据えたあたりが、何か見えてくるような取組ができるといいかなという気がした。

そのためには学校と地域が、地域課題をそれぞれ局所的な地域の課題を共有できるようなことをしていくと、原井小学校のようなこともできるのではないかという気がした。

いろいろなところで、それぞれがやっておられるが、学校と地域が本当に共有できているのかなと思うところもちらっと感じたりするところもあるので、これをするとすごく頑張っていくのではないかなという思いを持っているところである。以上である。

続いて岡山委員お願いする。

はまだっ子共育推進事業の本当の肝、ハブになっているのはま

久保田市長
岡山委員

ちづくりセンターであるということは間違いないことではあると思うが、まちづくりセンターが、今浜田の高校の魅力化のコンソーシアムがあると思うが、あのような人材バンク的な、人材をデータとして持っているかということを知りたいところである。

例えば職員の方が、いろいろな人を知っているから、じゃああの人と連絡をもらって、あの人と繋げましょうということは、今までされてきたことだとは思いますが、例えば職員の方が転勤をされたとか退職をされたとかということになると、そこがぶつ切り切れてしまうと、またゼロからやり直しをしなくてはいけなくなってしまふのかなということ。

もうデータベースのように、この方はこんなことができ、こういう声掛けをしたら、こんなことができるということ、もう見える化していれば、例えばそこに先生方がアクセスすると、じゃあこの人に声をかけよう、こういうことができるのではないかなということが、もっとスムーズになるのではないかなというふうに思う。

まちづくりセンターに問い合わせをして、どうしましょうかということも流れの一つではあると思うが、最初にデータベースがあり、これをやりたいから、こんな人が地元にいるらしい、じゃあ繋げてもらえないか、そういった方がもっとスムーズではないかというふうに思う。

職員の方が動かされた時にも、ずっとデータとして残っていくので、そんなかたちにできないのかなと、ちょっと思っている。

あと中学校になると、地域の課題解決をしようみたいな総合学習がだんだん入ってくると思うが、中学生たちに、例えば、地域の高齢化をどうにかしてくださいとか、少子化をどうにかしてくださいというテーマを与えて、あなたたちが考える高齢化対策は何かと聞かれても、大人が解決できないことを子どもたちに考えさせることはすごいことだと思う。

それよりも、今自分が持っている能力とか興味関心がある中で、今の地域課題のところ、自分たちの関わっていけるところはどうか、これだったら私たちは地域に関われますよという、そういう関わり方を持たせてあげる方が、今後に関わっていくと思う。

自分は例えば高齢者の方とやりとりをすることが好きなので、

地元の高齢者の方と、もっと中学生が仲良くなるにはどうしたらいいか、みたいなことを考えていくと、例えば、じゃあ今度卒業した、地域で活動する時にはそういう集団に入ってみようかなみたいなかたちになるのではないかというふうに思うので、子どもたちの興味関心をベースにして、地域課題を考えさせてあげて欲しいなというふうに思う。

よくある地域課題を解決するために何か考えてというやり方はちょっとどうなのかなというふうに思っていた。

子どもたち自身の声をベースにした、地域課題への取組方を考えていただきたい。以上である。

久保田市長

いくつか質問あるいは意見が出たが、地域政策部からお願いする。

永田担当課長

いろいろとご意見をいただき、ありがとうございます。

宇津委員、花田委員からの、子どもたちが企画して事業の構築をという点があったかと思う。

こちらについては、もう少し説明させていただくと、今福小学校区で3つの今福、久佐、美又のまちづくりセンターにおいて、夏休みの子どもたちの楽しみとして、児童クラブを巻き込んで活動をしているわけである。

こちらについても事前に、自分たちが何をやりたいか、一体どういったことをしたいかというところで、事業団の計画の段階から子どもたちを巻き込んでやったというところである。こちらの活動が先ほど紹介したが、子ども企画の事業というところで、子どもたちが、今校庭で駆け回っているが、こういったアイデアを持って、鬼ごっこのようなことを自分たちがやりたいということで、計画をしてやったりというところである。

弥栄においては、弥栄のまちづくり推進委員から、弥栄のみらい創造会議のときに、子ども部会があり、毎月1回行われる「や市」に出店をしていたりというようなことをしていたり、弥栄の中では、子どもたちが実際に、大人がやっているイベントに自分たちが自主的に参加しているような状況である。

杉野本委員がおっしゃられたのは、資料3-2の2ページの「ハマダニア」のところか。

杉野本委員

資料3-3の2ページの原井小学校の「浜田の魅力を伝えよう」のところである。

特色ある実践事例集で、4年生が海でしっかり楽しみ、そのあ

永田担当課長

と、資料 3-4 で 5 年生が海の魅力を考え、課題を考えていく。連続的継続して、子どもの意識が、本当に海を大事にしようと繋がっていくという、素晴らしい取組だと思う。

今のは学校の方での取組ということで、今年度から海というのは子どもだけではなく、浜田の宝というところでもあるので、新たな事業として、渚の交番 be を活用して、センターが事業を実施する場合には、大人も子どもも一緒になって、浜田の海を楽しんでもらいたいということで、少し新たな事業を構築し、事業支援に取り組んでいるところである。

岡山委員がおっしゃられた人材バンクについては、確かにおっしゃられるように各センターそれぞれのいろいろな地域の技とか、そういったことを持っておられる方を主事の方は知っているが、データ化まではしていないので、そういった視点を取り入れながら、いただいた意見を検討しながら計画に取り組んでいければと思う。

学校と地域を繋ぐところについては、今年度は各学校の教頭先生と地域に地域学校協働活動推進員という者がいるので、地域の窓口と担当者を名簿化して、学校が直接そういった事業をしたいが、協力していただける方をご紹介いただけないかということ、直接地域と繋がるような仕組みも、今年度作っている。

久保田市長
邊担当部長

地域政策部から他にあるか。

共育推進事業については、地域の子どもたちを一方向的に育てるというわけではもちろんなく、子どもたちと一緒に学ぶことによって地域の皆さんが成長するというのが、非常に大事だと思っている。

このためには先ほどからあるが、子どもたちの自主性を高めて企画立案から関わっていただくというような、一緒になって取り組むというのが大事だということで、そういった取組を特にまちづくりセンターをキーに、中心として取組を進めさせていただいているところである。

そういったセンターの機能強化ということもあつたが、公民館をまちづくりセンター化して、社会教育主事の資格取得も今どんどん毎年各地域で取得に努めているところである。

それから、島根県から派遣の県の派遣社会教育主事の先生方も連携しながら、どういった取組ができるかということでヒントもいただいているので、また改めて整理をして取組を強化してい

きたいと思っている。

久保田市長 先ほど花田委員からあったが、子どもたちがどの程度参画するのか。先ほど、企画の部分は子どもたちが出したとあったが、企画は子どもたちかもしれないが、実際には大人が結構段取りをしてやらないとできないのかなという気もするが、その辺はどうなのか。

永田担当課長 大人が主導的などころはあるが、極力子どもたちの自主性というか、考えに沿ってというところである。

ただ、できないところを大人が手助けをして、極力子どもたちにやらせるというか、そういった格好で事業やっているということは、センターの職員からは聞いている。やはり子どもだけではなかなか難しいところがある。

通常の事業よりは子どもに関わってもらって出番を作るようにしている。子どものアイデアをできるだけ尊重しながらやっている。

久保田市長 花田委員いかがか。

花田委員 私はおやこ劇場で子どもの企画をずっとやってきたので、何もおやこ劇場でやれていた子どもたちが精鋭だったわけではない。どれだけ大人の権利を渡すかという、もうそれだけである。

大人がどれだけ邪魔をしないか、ということだけですごい力を発揮する。本当にこの協調学習そのものである。

大人が答えを持っていて、それに乗せていくっていう企みを持っている大人であれば駄目である。それを本当に預ける。最後まで責任をとってもらおうという、セットで自由をあげることが本当に、結局のところは大人の腹のくくりで子どもの力が育つかどうかというところである。

先ほど岡山委員から言われたが、少子高齢化をどうするか、聞いたらいと思う。子どもは答える。すごく考えている。聞かれたことがないだけ。

そういうことを考えてもいいよと言われたことがない。経験がないのは、その経験がない。

本当に考えていいと言え、本気で考えてすごいことを出してくてくれる。それにはこちらが、子どもだったらこの程度というような気持ちで聞いていたら駄目で、本当にできるかもしれないみたいなことが本当にある。子どもの力は、可能性は大である。

実際子どもたちとやってきたので、そこは実感として私は思っ

ている。

もちろん段取りとして、どこかの場所を借りるとか、大人の力はもちろん必要な部分はある。フォローは必ずいる。そこは保障するが、子どもたちに育ててもらいたいというか、力をつけてもらいたいのであれば、預ける部分は随分、たくさん預けないと育たない。

田んぼを作るのがいい例だが、田植えと稲刈りしか行かないで、田んぼの事業をやったというようなものは、あれはもう本当にいい例で、そんなところではない。間にも行って、どういう困ったことがあってということをやっこそ、身になるというか、実感できる。

本当に子どもの力を借りて、まちを作っていくという意識がないと、子どもにさせてあげるということになる。皆さんの声を聞くと、させるとか、育てるとか、絶対大人が上になる。そこを何とか隣に、隣に立ってくれないかなと、常々思うが、今の会だけでも大変思った。

そこがキーで、やはりこれから子どもたちの力を借りて、いいまちを作っていく。もう本当すぐ大人になる。そうしたら、そういう子ども時代を過ごした子どもが大人になったときは、浜田市は素敵な浜田市になると私は思っている。それを期待して、やり方というところは言わせていただきましたかったので、聞いていただいてありがとうございます。

久保田市長

私は浜田市のような、こうした地方にとって、こういったふるさと教育とか、浜田市ならではの、地方ならではの取組だと思う。

都会の子どもはそれができない。ふるさとという意識もあまりない。

学力は塾に行ったりして向こうの方が上かもしれないが、しかし、自然に触れたり、高齢者の方、いろいろな地域の方々と触れたりとかする。また、将来ふるさとに愛着を持って欲しいという、こちらの気持ちもあるが。やはりそういう意味では、このテーマにはもっともっと力を入れていきたいと思う。

そうした中で、今日花田委員、それから岡山委員からもあったが、もっと子どもたちに参画してもらおうような、まだおそらく、大人が段取りをして、子どもたちはまだお客さんの感じが出ているかもしれない。

勝手にいうわけにはいかないが、本当に子どもたちに知っても

らう、考えさせるということをやっ、今後力を入れてやってもらえればいいなと思う。ただそのためにはおそらく2つあって、一つは時間の確保が必要だと思う。

例えば企画だけではなく、準備することの大変さを知ってもらおうと思ったら、時間をどう確保するか。それと学校現場とその辺も調整しないと、理想は良いが、なかなか子どもたちの時間を確保するのは難しいのかなと思う。

もう一つは、前段の協調学習について。皆さん、あれは良いという評価だった。

おそらくまちづくりセンターの主事の方たちも協調学習的な取組、そこにある種の指導力を磨かないといけないというか、学校の先生だけではなく、まちづくりセンターの方々も、協調学習的に子どもたちを乗せるというか考えさせる、そういうある種の、進め方をまちづくりセンターの方々にも身に付けてもらわないといけない。

そうすると、まちづくりセンターの人たちも、先ほど言った学校の先生の研修会みたいなものがあつたが、まちづくりセンターの方々も、子どもたちを乗せるためにはどうすればいいかというようなテーマで、何か研修会みたいなのも必要かもしれないと思つたが、岡山委員はいかがか。

以前、中学校で協調学習を見たまちづくりセンターの方が、その手法を使って、地元バイパスができるので、どういうまちづくりをしたいかという、そのまま協調学習のスタイル使つてやつたという例がある。

まちづくりセンターの方も多分協調学習というものを知れば、これ使えるのではないかと、十分思われるはずだとは思ふ。

もっと、ICTもそうだが、やはりまちづくりセンターの方は今子どもたちが何をやっているのかということ、もっと学校に行つて見てもらつて、多分伝え方も変わるし、子どもたちの方がプレゼンするのは実は上手かもしれない。

ICT機器を駆使して、プレゼンをやる能力なんかはもっと進んでいるかもしれない。それを大人側が全く知らずに、地域にそれを波及させていなければ、もっと子どもたちとの距離感が開いていってしまうと思う。

本当に子どもたちと一緒に活動をして大人たちが伸びるというのは、まさにそこではないかなと思うので、その辺りをもっと

強化されるといいのかなと思った。

久保田市長 今のいいご指摘だったと思うが、まちづくりセンターの人たちも学校の総合学習とか、そういったことの見学をできるようにしたらどうか。できないのか。

永田担当課長 見学というか、総合学習の面で先ほども、田植えだったりそういうところで、関わっているというような人たちであるか。

久保田市長 私が言いたかったのは、その教え方や子どもの接し方を、まちづくりセンターの方々にも学んでもらう機会を作れないかという趣旨である。

邊担当部長 今まであまりなかったと思うが、そういったスキルアップ研修というような機会は必要だと思う。それはできると思うので調整したいと思う。

久保田市長 その辺りどうすればいいかということを経理部長と相談して。皆さんいかがか。

花田委員 逆もあるかなと思う。

すごく私は嬉しかったが、久保田市長が協調学習のやり方とこのまちづくりのやり方が、結局は共通ではないかと言われたことが、すごく、最後に私が言いたいと思っていたので、とても嬉しかった。

その学習集団作りについて、これたぶん室長のこだわりだと思っていて、そこがちょっとずれているところが気になったので修正したかったところがある。

子どもの声で作る授業による実践プラス、学生集団作りだし、授業力向上プラス学級経営力である。ということは、集団がないとこの授業ができないのかではなく、この手法を使うから学習集団ができる、学級のいい集団ができていくという意味である。

そういう意味で、まちづくりもその手法を使うから、町ができていくと思うのだと思う。

なので、どちらかという学校の先生の方がまちづくりセンターに行ってみた方がいい場合もあるのではないかと。お互いに。

社会教育的手法としてはまちづくりセンターの方が長けている場合もすごくあると思うので、何かそういうやりとりができていくととてもいいような気がした。

久保田市長 非常にいいご提案だと思う。少なくともふるさと教育とか、協働のまちづくりというのは、こういった部分については学校の先生たちも、あるいはまちづくりセンターの方々も、ある程度共有

邊担当部長

をしてもらって、協調学習の仕方とか、あるいはどうすればいいか。そういった共有できるような場作りとか、お互いの研修をす
るとか、見学するとか、それは工夫をして。

学校とも連携をして、どういった対応ができるかということ
を整理したいと思う。

先ほど少し申し上げたが、まちづくりセンターの方では社会教
育主事、社会教育の手法をどんどん取り入れたいということで、
社会教育士の認定の資格取得を今進めているので、そちらを進め
ていきたいなと思っている。

久保田市長

この事例集もたくさんあるが、やはり中身というか、そろそろ
力を入れていくためには、指導する指導者をいかに育てるかとい
うことも必要なと思う。

宇津委員から最後何かあるか。

宇津委員

先ほど社会教育主事の資格の取得について、だんだん増えてき
てるという表現があった。

資格だけで云々ということはないが、そういった学習をするこ
とによって、幅広い物の見方ができるようになる、とても大事な
部分だろうと思う。

そういう人たちがだんだん増えていって、もちろんまちづくり
センターの中にもそういう人たちが数人いるというような状況
が生まれれば、なお結構ではないかなという気がする。

学校教育だけではなく、社会教育の部分も合わせもって、物事
考えられる、そういう人材が育つといい。よろしく願いしたい。

久保田市長

杉野本委員から何かあるか。

杉野本委員

とてもいい勉強をさせていただいた。

いろいろなたくさんの地域のこととか、一番子育てで忙しい保
護者が地域といかに関わりを持つかという辺りのアプローチが
できたらいいと思う。

伝えるのが、学校からもあるし、地域の方からもあるし。まち
づくりでも、若い大人がなかなか参加しにくいところがある
ので、なんとかクリアできるといいと思う。

久保田市長

あと皆さんの方から何かあるか。

岡山委員

先日、新聞に中学生が公園整備をしてもらえないかというこ
とを、浜田市議会に訴えかけたみたいな記事があったが、そも
そも、やはりそんなことができると思って子どもたちはたぶん
生きていないような気がするので、あのよう自分たちが訴え
かけた

久保田市長
岡田教育長

ら、話を聞いてもらえるということをもっと何か関わりの部分でオープンになっていたら、声を上げる子どもたちはいるのかなと思う。

そういう方向に持っていくにはどうしたらいいか、大人とたぶん関わりを持つのではないかというふうに思った。

あの記事を見て、すごく希望が持てたというか、いいことだなというふうに思った。ぜひ何か別の学校区でも、あの記事を皆に見せてあげればいいと思った。

教育長から最後に。

今子どもたちが社会に出ていくときに、こんな力を身につけておいてもらいたいなということがあるが、それはテーブルの上とか学校の机の上の中だけで身に付くものではなく、いろいろな経験をやはり積んでもらうことが大事だと思っている。

それは教科に載っていた知識ということではなく、例えばいろいろな問題意識だったり課題意識であったり、それが実際に地域に出て、多くの人たちといろいろもまれあって、うまくいって達成感があるかもしれないし、失敗して挫折感に近いものがあるかもしれないが、そんなことを経験していくことが、やはりステップアップに繋がっていくのだらうと思っている。

当然学校だけでできない、家庭だけではできないようなところを、地域の皆さんのお力も借りながら、総がかりで、やはり子どもたちの育ちを見守っていくかということをやっていかなければいけないというふうに思う。

それもお膳立てしたものではなく、やはり子どもたちが主体的にこうしたいというものを導き出せるような取組が今必要ではないかと思っているので、そうした仕掛けをまちづくりセンターがまちづくりの拠点ということもあるし、共育に携わっていただいている皆さん方とやはりしっかり話をしながら、進めていく必要があるかなと思う。

久保田市長

私も実は大学で、地域経営を教えている。仕掛けと仕組みが重要だということを学生に話している。仕掛けをして、それがちゃんとうまく回るような仕組みづくり。

今日のお話を聞いていても、やはりその仕掛け、仕組みづくりが大変重要だなと思った。子どもたちを乗せるというか、その気にさせる仕組みが必要だし、そこであまり大人が入り込みすぎないようにするのも仕組みだと思っているので、大変いろいろなヒ

ントをいただいた。

教育部署それから地域政策部署の皆さんだけでは終わらないと思う。学校現場の方々、まちづくりセンターの方々、皆さんと共有しながら、対応を、まさに仕組みづくりをお願いしたいと思う。

副市長から一言あるか。

砂川副市長 私は防災訓練に子どもにもっと参加してもらえればいいと思う。高齢化している中でやはり子どもさんの力は必要である。

岡田教育長 今度校長会で防災の担当が行って話をすると聞いている。

久保田市長 新潟県の見附市だったか、防災訓練の主役は中学生だということである。高校生は学校を出て地元にはいないが、中学生は地元にいるので。

岡田教育長 前の校長会で防災訓練を、例えば学校で防災訓練に出なくても、地域でやるのであれば子どもたちをぜひ出してくださいということを行った。

宇津委員 だけど今のお話はそれよりさらに先、子どもたちが防災訓練についていろいろアイデアを出していくことだろうと思う。

砂川副市長 中学生になるとものすごい力を発揮する。

宇津委員 最近では避難要支援者の方の移送も高齢者が高齢者を運ぶみたいになっているところもある。全部の地域で対処できることではないが。小学生でもできることはあるので。

砂川副市長 個々に役割を与えてあげるということは大事かなと思う。

久保田市長 訓練のときにきちんと、あなたはこういうことをお願いするということ。

各委員 それでは時間になりましたので、皆さんご苦労様でした。ありがとうございました。

各委員 ありがとうございました。

終了 11:57